

# ありきたりを脱するべくも

澤好摩／樋口由紀子（川柳作家）／山田耕司

耕司 第二回円錐新鋭作品賞の審査会

本日は何と兵庫県姫路市に伺っております。特別審査員として樋口由紀子さんをお招きしたのですが、今回の審査会は樋口さんのお世話をいただき、会場をセツティングしていただきました。

樋口さんどうぞよろしくお願ひします。樋口さんは、円錐をずいぶんと読んでくださっていますね。

由紀子 よろしくお願ひします。円錐、大好きです。

耕司 ありがとうございます。また、今回は審査をお引き受け下さってありがとうございます。

由紀子 かなり緊張しています。

\*

耕司 推薦作品をあげていっていただきたいと思います。

好摩

境界線

肩 遠火事

夢 漫画を買いに

秋と幾何学

煙突

神火

由紀子

豚二十句

ゆずりはの國

竹ノ塚心中

秋と幾何学

狩を終えて

明朝体

川を越える

好摩 みごとに重ならないね。

由紀子 ちよつと、びっくりしました。

こんなもんなんですか？

耕司 それでは、これだけ選がバラバラですから、ご自分が推薦する作品を上位

から、しかも面白いと思うところを指摘いただきつつ、選評をお願いしたいと思います。では「境界線」について、澤さんから。

### 読むに耐えうるかどうかを考える

好摩 二十句中、十一句に○がついて、特選も二句あったので、この作品を上位にしました。これは人によって異なるんだろうけれど、俳句に何を目指しているのかがある程度見える人と見えない人（選をする上で）分けちゃったんだよね。俳句として少しでもカタチになっている作品を選ぶ傾向があつて、迷ったんだけど、例えば、

海山に遠く暮らして花見酒

ビル街に飴のごとくに大西日

蛸や人には看取りてふ仕事

冬の山けものみちより暮れゆけり

吉凶の出ぬ初夢でありにけり

こういう句がいいと思つたんです。

穴惑ひ駅はいつでも工事中

こういうのも面白いと思つたんだよね。

耕司 ふうむ。

由紀子 ふう。

好摩 これも少し言いきなだるうけ

れど

少女とは自他に残酷白牡丹

ま、ちよつときわどいつて言えばきわどいんだけど。

耕司 季語である「穴惑ひ」に対して、穴という類想の一つとして都市における「工事中」という関連性を押さえて見せました。一方で「いつでも」という措辞がこの類想に水をさしているようにも思えますが、いずれにせよ、二〇句を揃えるのはたいへんなことですから、そういう意味で、「境界線」は安定感があつたということでしょう。

好摩 第一回円錐新鋭作品賞のときも私は旧派の代表みたいに言われたんだけど、私はね、へんに新しがってなんかごちやごちやした句よりも、やっぱり作品として読むに耐えうるかどうかを考えたから、古いつていえば古いんだよね。

耕司 ふむ。

好摩 ただ、ぼくはね、新鋭作品賞の応募に関して「新しい」の「古い」の言つてもしょうがない、という頭がどうしてもあるんですよ。

耕司 なるほど。たしかに「新しい」と

いっても、何を新しさにするかは人によって違いますし、題目だけで新しさを求めても仕方がない。でも、新鋭作品賞ですからね。そもそも澤さんは「奇襲をゆるさぬ」といったところがありますね。好摩 奇襲も見事にはまればいいけどね。そしたら激賞するけどね。たぶんうまくいつてないだろうなと思うね。そう（うまくいつてない）句が多かつたように思います。

耕司 樋口さんは「境界線」の作品についてはどうですか？

由紀子 ううん。安定、そう、安定しすぎてるのがダメだったのかも。「穴惑ひ」駅はいつでも「工事中」の「穴惑ひ」の後にキレがありますよね。ところがこのキレの前と後で繋がりがすぎてるっていうのかな。読みやすいことは読みやすいんですけど。わたしにはちよつと物足らなかつたわけです。

耕司

いづこにも貴種流離譚秋の虹

季語の持つ気配に対して「貴種流離譚」というアンサーを出しているところに、安定感があると思います。しかし、「いづこにも」がその関係に参加していない。

そういう点で言えば、澤さんがあげた「穴  
惑ひ駅はいつでも工事中」の「いつでも」  
などにも、同じような手当の気配を感じ  
ました。こういうフレーズのありようは、  
私が思う〈安定〉とは異なります。

好摩 作品を読んできてやっと俳句らし  
いのに会えたなと思っただよね、この  
「境界線」で。

耕司 なるほど。

由紀子 そっか、そっか。

### 表現を何かに邪魔してもらおう

耕司 山田が最上位に置いたのが、「秋  
と幾何学」でした。この作品群は、句と  
しての評価を一般的な感覚で行えば、か  
なり問題があるとされるかもしれないま  
せん。一般的には、自分が書きたいこと  
を書きたいように書けると思われている  
ようです。しかし、この「秋と幾何学」に  
おいては、書く上で何かに邪魔をして  
もらうことを期待している。そもそも俳句  
というものは、そうやって自分の表現を  
何かに邪魔してもらわないものかもしれ  
ませんけれど、この作品においては、そ  
の何かを人間の営みから距離を置いたと  
ころに見出しているようです。

行く秋の小鳥の数がおりてくる

わざわざ「数が」と入れている。この不  
器用さ。自分が受け取り書き上げるもの  
にわざわざこうした即物的な修辞を入れ  
ることで、自分の主観に邪魔をする。そ  
んな作用を自分に施しているわけです。  
自分の中に何かが覚醒することを期待し  
ているように思っただね。

線をひく秋の海からまつすぐに

この句の「まつすぐに」はそうしたこだ  
わりとして作用していなくて、類型的な  
観念の方に倒れてしまっていると思いま  
す。

いずれにしても、俳句とは自分の個人  
の感情を妨げてこそ面白くなるという意  
気込みを、この作品から総合的に受け取  
りました。ということ、その志向をふ  
まえて〈新鋭作品〉として評価しました。  
好摩 なるほどね。

耕司

雁一羽空に浮かべて母ねむる

雁は空を飛ばし母だつて眠るうというも  
のです。この二つに直接の因果関係があ  
るわけはありません。二つのものを合  
理的な因果関係ではないところで結びつ  
けてしまうのが俳句というものですが、

おそらく「浮かべて」というところに、

物理的な構造としての回路を覗ようとし  
ているフシがある。母という日常の連続  
と、雁という季における大きな題である  
空間の高いところにあるはずのものを、  
ヒキの絵で見ている。そのヒキの絵にす  
る契機を、幾何学的な感覚をシバリにす  
ることによって得ているように思いま  
す。そういう回路を全句に及ぼそうとし  
ているところに、自分語りではない表現  
への志向がある。それに共感しました。

由紀子 わたし、この「秋と幾何学」は、  
うまいと思いました。「行く秋の小鳥の  
数がおりにくる」の、「この「数」。「数」  
で虚構を作ったような気がしたんです  
よ。

やがて夜となるりんごの内部かな

この「内部」。

物音のあと空いてある秋の夜

空いてあて月のかたちのあるばかり  
この「空いてあて」という表現に、なん  
だか立ち止まらせる力があるように思  
いませんか。何かに到達している句でない  
んですけれど、流れがきれい。こういう流  
れに惹かれました。「ポケットのほこり  
のなかの零余子かな」とか「雁一羽空に

浮かべて母ねむる」とかは引つかからなかった。引つかかり方が、わたしと山田さんは違うなと思いました。

耕司 あはは。

由紀子

掃きながら金木犀の陰日なた

これも、好きです。「掃きながら」なんて書いたら説明っぽくなるのに、「金木犀の陰日なた」がくることで、ぜんぜん説明っぽくはならなかった。そういう意味で稀有な句だと思います。

耕司 ふむふむ。

好摩 その句、私も印はつけてます。

由紀子 この人はうまいと思ったんです。私から見て、俳句的に。私が思う俳句的になってというのは、一般的なのとちよつと違うのかなと思いますけど。

耕司 人それぞれでいいんじゃないでしょうか。

好摩 そうそう。

それはそうと、この作品を見てみると、中にはいい句もあるんだけど、

じゆず玉がひとつだけ箱の中の夜

こういうのが、かなり安易だなんて見えちゃうんだよね。

由紀子 それはわたしも思います。自分

で酔っちゃってるよね。

耕司 抽象的な構造を意識し始めると、結局のところ句の中で〈意味〉が邪魔になるんだと思います。何か小さな存在が箱という構造に入っている、その中を見たいないが想像している、という着想があるとして、「じゆず玉」が作者の着想以外の意味を読者の方に広げてしまうところがあります。そして、そうした時に、句柄が小さくなってしまおうということがある。

好摩 あるね。

耕司 樋口さんがおっしゃっていたような〈流れ〉としての魅力というのは、むしろスキマが多い句の方にあるように思います。

## ニヒリズムに溺れないニヒリスト

耕司 樋口さんイチオシの「竹ノ塚、心中」に進みましよう。

由紀子 わたし、これ、惚れました。

耕司 「惚れました」、いい言葉ですね。

由紀子 わたし、今回、田錐新鋭賞の選を引き受けてよかったと思うほどに、惚れました。

耕司 それは、よかった！

由紀子 澤さんと山田さんの二人の選にどうして入らなかつたんだろうか、不思議です。言葉のつなぎ方にしても、言葉の組み合わせ方にしても、言葉の存在感をものすごく出していると思うんです。

セーター薄くツバメの来ない部屋に棲むこの句の「薄く」。この持つてき方。

ぶらんこの傍のひなたをもて余す  
こんな小さなひなたさえも「もて余す」。  
そんなところ。

知つてゐるはずの坂道だがかげろふ  
「だが」という言葉があつて、そのあとに「かげろふ」と来て詩情を出している。

ひだまりや田中に生まれなかつた僕ら  
これが一番好きなんです。

好摩 ああ、これ面白いよね。

由紀子 ぽんと「ひだまりや」で切つておいて、微妙な気配を漂わせながら「田中に生まれなかつた僕ら」とくる、この感覚がいい。〈切れていても何かがつながっている〉最後の「僕ら」が、うまい。この複数形の表現で、最後で広がりが出ました。

好摩 「僕」だけじゃダメだよ。

由紀子 ダメです。すべての言葉のつなぎ方、言葉の関係性のつけ方がうまいんですよ。ひとつひとつ言葉を積むことによって、露骨では無いんだけど、あつと思わせる存在感を出してると思いました。助詞とか助動詞とかがね、こんなに慎重に選ばれた句ってめずらしい。よくぞ、この二十句を並べた、と。言葉ってこんなに様々な表情が隠れていたんだなあって思いました。

なんで、これ、みんな褒めないんですか？

耕司 この句の言葉の面白さはありませんね。「つばめの来ない」という実態に対して、「セーター薄く」という関わり方は、なかなか来ないですね。

由紀子 来ないですよ。

耕司 おそらく、私には、俳句を読む時に、いつのまにか〈複数の仕掛け〉を求める傾向があるのかもしれない。ですから、一つの物事をスツと書き切れていると見て取ると、ですから、いまひとつという気分になる。読後に意識が句の頭に還ってくるようなのが好みなのですが、「竹ノ塚心中」は、スツと縦に抜けたかった。

枯蔓を少し引いてもわからない  
「枯蓮のうごく時きてみなうごく 西東  
三鬼」を例にとると、「うごく時きて」と「みなうごく」の間は文法上はつながっているけれど意識上のキレが存在している。そのキレをふまえて、句の全景を見たくなる。それからみると、「少し引いてもわからない」というのは、ぼんやりと不思議な感覚は残るけれど、全景をあらためて見てみたくなる句ではない。

由紀子

卒業の肩凝ってゆく向後かな

これは、頭に還っていきませんか？

耕司 たとえば

べんべん草団地が建つてからくらがり  
この句の内容は、よくわかる。わかっ  
てわかったまんまになっちゃう。「向後」という言葉の選びに面白みを感じるきらいもあるかもしれないけれど、「卒業の」と組み合わせることで、卒業後を示す情報以上のふくらみを味わえなかったんですね。自分自身に「俳句のアク」みたいなものがびりついてしまっているのかも知れません。  
好摩 「ひだまりや田中に生まれなかつた僕ら」や「ぶらんこの傍のひなたを

もて余す」「知つてゐるはずの坂道たがかげろふ」「死後あたたか郵便受けをあふれる紙」あたりに印はつけているんですけども、一方で「都営団地バケツみどりに水凍てる」「湯気立てや豆苗おのづから育ち」「春めきの穴があつたら覗く癖」「寝て夏を塩酸つくるからだかな」とか、わけがわからない。「ぎらぎらと子子煮える一斗缶」こういう句が一緒にあるということ、僕はだいたいぶ点を引いたかった。

耕司 わけがわからない、というよりは、わかりやすすぎたということはあるかもしれないが。

好摩 「わけがわからない」と言ったのは、句の内容ではなくて、何でこういう句を書く必要があるのか、ということですよ。

耕司 ともあれ、今回、第二回円錐新鋭作品賞を開催してよかったと思います。樋口さんにこれほどまでに「惚れた」と言われたら、作者冥利でありましょう。そういう出会いが生まれて、うれしい。  
由紀子 ほんまに、惚れたんです。ありきたりじゃないですよ。セーター薄く」なんて意外と言えませんよ。

歌座や公園ぬるくつるみあふ

こつこつと俗をバチャツと持つてゐるよ

耕司 バチャツと！

由紀子

あぢさゝぬへうつむいてゐるいろんな母  
「いろんな母」ですよ。「死後あたたか」  
これも、うまいなあと思ひましたし。

内容がどうのとか説明がうまくできない  
んですけど、言葉で作った世界のうま  
さみたいな、へ二ヒリズムに潮れないニ  
ヒリストへみたいな。

耕司 ふうむ。

由紀子 それで、丁寧ですよ、作り方が。  
実感や手さぐりに根ざしてゐるんですよ。  
ね。それでいて奇妙で不可思議な感覚を  
出していると思うんです。いや、こんな  
書く人がおるんやあ、と思ひましたね。  
好摩 この作者は投句した甲斐があつた  
よな。

由紀子 ほんと。わたし、出合えてよかつ  
た。この四十の応募作の中では、ダント  
ツです。「秋と幾何学」は、うまいと思つ  
たんです。うまいねえ、この人と思つた  
んですよ。前回、山田さんが選んだ佐藤  
文香さんの作品のうまさみたいな、そん  
な感じ。

耕司 ええと、ちよつと質が違いますけ  
ど。

由紀子 俳句というのをよくわかつてゐ  
なといううまさ。ところが、「竹ノ塚心中」  
の作者は、そんなんじゃないんですね。

耕司 ここは、姫路。姫路といえは車谷  
長吉。車谷長吉の作品で『赤目四十八瀧  
心中未遂』がありますが、姫路の樋口由  
紀子さんが惚れたのが「竹ノ塚心中」と  
いうことで、なにやら不思議な縁を感  
じております。心中という言葉をタイ  
トルに用いていますが、この句群には、そ  
ういうドラマ性が強くにじませてあるわ  
けではない。あえて、ドラマを盛り上げ  
すぎない配慮があるようにも思います。

へ二ヒリズムに潮れないニヒリストへ  
というの、ドラマとしてではなく、あく  
まで言葉同士の関係性という点において  
の面白みを目指していると樋口さんが感  
じたからのご発言だったのかなと思ひま  
した。

由紀子 二十句で世界を創つたような気  
がしましたね。省略をじょうずに効かせ  
て、俳句的な現実を立ち上げたという感  
じ。言葉の組み合わせ方「セーター薄く」  
とか「死後あたたか」とか、「僕ら」とか、

細心の注意が払われている。そうしたこ  
ろが、この二十句にはあると思ひます。  
やつぱり、作品というものは「創る」も  
のだ思うんです。感じたことや思つた  
ことをそのまま書くんじゃないやなくて、作品  
化するべきだと思ふんです。それが、こ  
の二十句には、ある。キチツとあつて成  
功してる。

耕司 受賞した方には、七十八号（第二  
回円錐新鋭賞発表の次号）に新作を依頼  
する予定ですので、こちらもお楽しみに  
なさつてください。

### 俳句の土台のようなもの

好摩

空蟬のころがつてゐる景色かな  
第二位の「肩」ね。「景色かな」なんて  
仰々しいものをもつてきてそれを「空蟬  
のころがつてゐる」なんて形容すること  
は、まずありえない。これがね、一種の  
奇襲として「景色かな」っていうのが面  
白いと思つたんだよな。

昼寝などしてをる人を訪ねけり

バックモーターを充たす満天星躑躅かな

押入のわづかに開けり終戦日

大道芸人の帰つてゆけりクリスマス

衝立をへだて、嚙る晦日蕎麦

蝉梅や黙つて父と子のならぶ

こういう句が、好ましいなあと思つたね。不可解な句もいくつかあるんだよね。行く春の追ひ越し列車見送れる

耕司

日曜の駅は恋人たちの冬

こういう句は入れないほうが、作者の名譽のためにはいいんじゃないかと思ひました。

由紀子 二十句揃えるつて、難しいですよ。ね。

耕司 そうですよ。既視感があるかないかだけではなく、キヤッチコピー的なものが句として出される場合には、よほどのインパクトがないと、句が〈情報〉という位置に後退してしまう。

好摩 ふむ。

耕司 「押入のわづかに開けり終戦日」こうした句は、何かを感じさせながら、その落とし所が理に寄るわけではなく、叙景に収める点で好ましいということになるんだと思います。ずいぶんと俳句を長くやつてらっしゃる方の手筋かなとも思いました。

好摩 それは、ある。

耕司

にんがつの乗客としてくははりぬ

この「にんがつ」などという言葉回しに、俳句に浸かりきつている重たさというようなものを感じてしまいました。

好摩 「乗客としてくははりぬ」に対して「にんがつ」は何の限定もしていないんだよね。南を「みんなみ」と言つてみたりするのは、あまり好きじゃないね。

耕司 牡丹を「ぼうたん」というのも、それですね。

由紀子 ありますよね。

耕司 そのままなんでしょうね、作者は。アパートに納まりのよい冷蔵庫

とかね。

好摩 だからどうした、とか言いたくなっちゃうけど。

耕司 樋口さんがさつきおつしやつた「創る」という点で、物足りないという意味ですが。

由紀子 ×がつかないけど、〇もつかなかった。

好摩 ぜんぜんダメということですか。由紀子 ダメというのではなく、ひっか

からない。ひっかかりが好きなんです。澤さんは、安定が好きで。

好摩 いや、安定つていうんじゃない

ね、全体としてどういうところに向かっているか見えれば評価するんだよね、僕はね。ただ、一句一句でんばらばらでね、中には比較的にうまくいつている句がある、なんてのはあまり認めたくないんだよね。その人が普段書いている俳句の土台のよなものがどこかで見えてこないと思ひ、面白くないなあと思う。やつぱり、なんだこれは、というよなのがあると、どんどん減点が増えちゃうんだよね。

由紀子 なんだこれは、となるとわたしはプラスに受け取るけど、澤さんにはペケなんだ。

### 設計図通りに書けている充実感

耕司 次に行きましょう。私が次点としてあげたのが「煙突」です。

囀りや硯の水は水のまま

水が何かに変容するわけではない。それは当たり前です。「いづかたも水行く途中春の暮 永田耕衣」を連想すると、どこかへ動き出すものとして見出されるのが、春の水というもの。それが、人の営みに組み込まれていて動けない。「囀

り」が自然界の命の有り様として対比されています。設計図通りに書けている充実感のようなものが、この句にはありません。

白鳥がぼん酢醬油のはるか上  
鳥雲にワイングラスは吊るされて

ここには、誰にでも共有されうる空間として、「白鳥」のいる「はるか上」や「鳥雲に」が示されている一方で、自らの営みに属するものがふと対比されています。いわば、「聖」と「俗」という見方もできるかと思えます。これも俳句の外側に設計図ができていて、それを俳句表現として成就させる書き方のように思いました。

冷奴しばし仏像として見る

わけわかんないけど、だから、面白いという一線。一切衆生悉有仏性とはいうものの、それを冷奴に見る。「奴」という語に、衆生が潜み、「しばし」が「冷奴」の存在を支えている、といった具合に、仕掛けが施されているようです。

由紀子 この句は面白いです。ほかにもいくつか〇をつけました。この「煙突」は。ただ、冒頭の

啓蟄を二人羽織でナポリタン

これがよくなって。

耕司

犬顔の一家ひまわり見上げて  
こういふ作品も、俳句としての面白さよりも素材の面白さに倒れてしまっているようで、うまく評価できないというところがあります。

由紀子 ○がついたのもありました。「囀りや碗の水は水のまま」と「冷奴しばし仏像として見る」のほかに

ジオラマの街にレモンが降り注ぐ  
これも〇です。

耕司 すさまじいことですな。

由紀子 それでも、面白かった。

耕司

皿に盛るプリンのダンス小鳥来る

こうやって小さくかわいくまとまっちゃう句があると、もつたいない。作品全体を推すののためらう理由となりかねないのは、わかる。

由紀子 この作品は、チェックはしましたね。先ほど澤さんが挙げた「肩」は、ペケはなかったんですけど〇もなかった、わたしにとっては。ほぼ△なんです。この作品には、〇とペケが極端にあっ

耕司 なるほど

由紀子

国道のコイン精米初日の出  
靴紐を結び直して葉牡丹へ

冬日向目指していないハリウッド  
こういうのがペケで、なにしろ「啓蟄の」を一句目にこれ持ってくるセンスは良くないよ、と思っただんです。たいてい一句目って、キメますよね。この人は、この句をトップにするセンスで、ちよつとちやうなど思っただんです。でも、〇もあるんです。

耕司

小春日の車窓にしばし泌尿器科

これは、「泌尿器科」という語にもたれかかっているだけで、「冷奴」のような仕掛けがない。「しばし」も微妙。そんな句もありました。

由紀子 「小春日の泌尿器科」だけで十分面白い。真ん中、要りませんよ。「車窓にしばし」ってなると説明で、ひとつにまとまっちゃって面白くない。

耕司 そうね。澤さんからのコメントは特に無いですね。

好摩 うん、まあ、無いね。「冷奴しばし仏像として見る」なんてどこがいの



か、ちつともわからない。

### 創作と嘘臭さとの合間

耕司 それでは、その他の作品についてもコメントしていきましょう。澤さんが挙げた「遠火事」いつてみましょう。

澤 僕は、一位と二位があれば、あとはどうでもいいんだけどさ。

耕司 でも、いくつか〇をつけてありますよ、私は。

由紀子 澤さん、どれが〇ですか？

好摩 囀りや木に登りゐる二度童子  
自刃録読む心太すすりつつ

如雨露手に泣く童あり草燃ゆる

遠火花辣油の瓶のべたついで  
着ぐるみを吠ゆる小春の子犬かな

由紀子 「遠火花辣油の瓶のべたついで」も、ムコウとコッチ。その対比、ちょっとありきたりのような気がしたんです。

好摩 「遠火花」がありきたりなんだよな。でもね「辣油の瓶」がべたつくくらいに書いた人見たこと無い。

由紀子 それは、無いです。ですから、この「辣油の瓶のべたついで」の言い回

しは良いと思ったんですけど、「遠火花」との対比があざといかなと思っただけ。それと

つるべ落としママに角ある5さいの絵  
こういうのは要らないと思いました。

好摩 そりゃそうだね。

耕司 如雨露手に泣く童あり草燃ゆる

これ、「如雨露手に泣く童あり」ここまでは、アリだとして「草燃ゆる」と添えるのは季語の押し込みに見えちゃう。季語の押し込みがキレになつたりパワーアップにつながることもあるんだらうけれど、たいていは、着想を減速させていっちゃうと思うんです。

好摩 「燃ゆる」が「萌ゆる」のはずなんじゃ無いかと。「燃ゆる」じゃ、如雨露と近すぎるよな。

耕司 「萌ゆる」でもあまり事態は変わらないとは思いますが、「つるべ落としママに角ある5さいの絵」の「つるべ落とし」も同じような押し込みでしょう。

秋風裡銀河の映る水たまり

これも、秋の風情を演出しているんですけど、水たまりに銀河が映るのか、と思う上に、秋風が吹いている。水鏡の

ありさまがふさわしくないのでしよう。好摩 樋口さんが言っていたように、「遠火花辣油の瓶のべたついで」の「遠火花」が効いていない。むしろ

黒揚羽呼ぶシーソーの双生児  
よつぽど良い。

耕司 ううむ。もつたいないですね。由紀子 もつたいないですね。自選つて大事ですね。

好摩 大事だね。

由紀子 二十句もある水準でもつてまどめるのは、むずかしい。

好摩 まあ、三位以下はどうだつていいんだよ。

耕司 三位以下はどうでも良いということですが、せっかく応募してきてくださったわけですし、少しでも多くの作品に触れたいと思います。山田が三番目に挙げた「神火」について。

由紀子 ああ、これね。

耕司 どれか一句を取り上げて評価しようというのではありません。これは、ある種のレポートです。

由紀子 これをどう評価したらいいのかわからなかった。

耕司 レポートと言っても、写真とは違つて言葉を使いますので、当然「作る」要素が入ってくるわけです。旅行吟なんかもそうなんですけど、あまりに典型的になると嘘くさくなる。こちらは、創作と嘘臭さとの合間をすり抜けつつ、二十句を同じような具合に仕上げたことを評価して、あえて選ばせていただきました。

長い前書きが付いています。新宮市の新倉神社での「御燈祭」の説明ですね。

由紀子 今回応募した作品の中に、同じように祭を扱ったがありました。

耕司 「春の峰」ですね。こちらにはへ出羽三山神社の蜂子神社で今春一五〇年ぶりに羽黒修験道の修行の一つ「春の峰」が執り行われた」という前書きが付いています。

由紀子 これと「神火」とくらべて、どう違いましたか。この違いがよくわからないんですけど。

耕司 「春の峰」の作品

セーターで稲霊に礼するならむ

たとえば、これは、祭に際しての自分の発見のようなものを詠んでいるんですね。自分の感性に映った世界がテーマなんです。ね。「神火」の作品をあげておき

ますね。

春暮ぐつぐつ頼むでえ頼むでえ

石階に草鞋組みあう御燈なり

岩の窪それぞれに水春夕焼

泥酔のひとり転がり落つ御燈

神火待つ岩をつき刺す地の言葉

岩肌のいくすじ凍る御燈かな

火祭りのゴトビキ岩に星いごく

火に眠り神火に目覚む岩のうえ

翳したる神火のゆらぎ虫を呼ぶ

上り子や三人の火は三様に

こちらは、自分の発見というよりは、どちらかといえば、この祭のガイドのような働きを指しているように思います。詩情ということであれば、「春の峰」のほうが優位と言えるかもしれません。ポエムです。

由紀子 はい。

耕司 「神火」のほうはガイドブックの中に出てくるキャッチのようですよ。ね。《作品》というよりも、《情報》に近いかも。ただ、俳句は季語についてその典型句を書こうという意識を持つ人がいるように、こういう句のフィールドもあるように思います。要は、こういうシバリをつけて二十句を同じような質で揃えた感

覚に評価のポイントがあつたということですね。

由紀子 それは思いました。よくこれだけの二十句も揃えたな、と。ただそれをどう評価するか。

好摩 僕は、「神火」の方が好ましいと思いましたがね。私は三句ばかり選んでるんだけど。

岩の窪それぞれに水春夕焼

翳したる神火のゆらぎ虫を呼ぶ

松明の触るまだ花なき桜

「春の峰」のほうは、どこか通俗的かと思う。こちらには

拝む手の媪いよいよちひさかり

こういう句があるけど、当たり前と言えば当たり前なことだよ。ね。

虫籠は裸電球より暗く

とかね。何もこんなこと書く必要無いんじゃないかと思う。

由紀子 なるほど。ま、「神火」のほうが統一感がありますね。

耕司 日本各地にこういう書き手がいたらかなり面白いんじゃないかと思えますね。ほつとくとすぐ述懐の方向へ走って行つてしまいがちなのが俳人ですけど。

## 不安を蓄えた句が並んでいて

耕司 さて、次は、樋口さんの三番目に推した「狩りを終えて」について。

由紀子 独特の想像力に訴えかけてきてるような、そんな気がします。報告のように見えるんですが、詩情があると思っただんです。

妻は僕が撃つたと言ったあとに泣いたこの句、内容は陳腐なんですよ。だけど、「うった」「いった」「ないた」をここにポンポンポンツと入れてきたのが面白いと思えました。

耕司 ふむふむ。

由紀子

みえなくもない冬の夜のこともたち紫陽花の無意識に似た海だった

甦るはずの鼻だったのに

この三つ、○を入れました。この二十句の中にテーマがあるような気がします。

耕司 そうね。

由紀子 そのテーマに揺られてみましよう、とまあ、そんな感じがしました。

耕司 一句一句を完結させようとは思いません。意識を持ってますよね。スキマがある。そのスキマから、作者ってどんな人なん

だろうと思うことで読者は読みの手がかりを得ようとする。そうすることで、全体が一篇の詩のように連動しているような感覚がもたらされる作品だと思えます。

由紀子 はい。

耕司 タイトルに「狩りを終えて」とありますが、一体何の狩りが終わったのやら、句からは全くわからない仕組みになっっている。そのことで、周縁性のようなもの、ズバリと物事を書き表すのではなく周辺のディテールをちよつとずつ見せるような、そんな感じをもたらし

ますね。その不完全な感じが、俳句の連作としては面白い束ね方だと思っただけですね。だから、一句としての完結を評価の対象にする場合には、この句群は「弱いなあ」と感じてしまっただけじゃないでしょうか。

由紀子 はい。二十句のテーマとして何かがあるというところなんです。

耕司

いつもより静かな海を泳いでいるこの句は、作者の日常に連続すると思えばなかなか面白いと思うかもしれないけれど、その担保がなくなっちゃって、さ

て一句でみたら「アマいんじゃないの」か、と思えるわけで、そこらへんで評価が分かれます。

好摩 そうなんだよ。並選の△じゃなくて○をつけてあるんだけど、これは、非常にきわどい句なんだよね。これは、いい句だと思っただけど、いい句だと言っているのかどうか、そこを迷う句なんだよね。

耕司 俳句ってこんなにアマくていいんですか？ という問いかけに良いとも悪いとも答えようが無いような感覚でしようか。

好摩 そうそう。それからね、みえなくもない冬の夜のこともたちこの句も面白いかなと思っただけだね。

由紀子 そうでしょ。こういう言い方したの聞いたこと無いなって。

耕司 こういう輪郭がユルい句で構成する連作には、ちよつとした言葉に反応して読者の方が勝手に衝撃を受けてくれる

ことがありますよね。

好摩 こういふ「みえなくもない冬の夜のこともたち」みたいな句で揃えて、しようもない句を削ったなら、もう少し良く

なるんじゃないかな。○がついたのが二句しかなくて、これじゃトップに取れなかったね。

耕司 作者は、こちらの常識や想像力のパターンを揺るがそうとしているんじゃないでしょうね。「みえなくもない冬の夜の子どもたち」はそういうところに立っている作品だと思えます。そういう意味でいうと

薔薇は真の存在だとも言えるだろう  
この句は情報としての扉が閉まつていて完結してしまっている。こちらを揺るがせる何かを潜ませていない。そんなふうにあります。どちらかといえば、物事への美意識を統一するよりも、情報の扉は開けつばなしで、その不安を蓄えた句が並んでいた方が良かったのでしようね。そういう不安感を煽るのをさらに磨いていただきたいですね。

好摩 そうだね。

由紀子 いいもの持つている。ただ、この散文調は気になつたんです。もうちよつと韻文を意識してもらいたい。

好摩 そういう句が並んでいる中に、「いつもより静かな海を泳いでいる」なんてあつたら際立つよね。

由紀子

たまに薔薇の影が絵画に見えるんだ  
薔薇は真の存在だとも言えるだろう  
この薔薇の二句はペケ、ペケ、です。

好摩 (笑)

由紀子 でも三番目に良かったです。独自の想像力を書いているような気がするんです。

好摩 「みえなくもない冬の夜の子どもたち」みたいな書き方で揃えてきたら、いくら保守的な私でも選ぶね。

由紀子 あはは。

耕司 あはは。

自分からしか見えていないことを

耕司 さて、次は、澤さん選の四番目「夢」。

好摩 一句、好きな句があつたんだよね。

メフィストの眼の色知るや初嵐

よくぞ、メフィストを持つてきたなと思つて。

由紀子 ふうむ。

好摩 「○○の眼の色知るや初嵐」と構えて、ほかのものではないダメなんだよ。メフィスト、よく持つてきたなあ。

耕司 メフィスト、とはメフィストフェ

レスのことですか？

好摩 そう。悪魔だよ。

由紀子 この句、良いですね。

好摩 ねえ。「メフィストの眼の色知るや初嵐」。「初嵐」も悪くないよね。

由紀子 でも、この人も足引つ張るのが多すぎで。

好摩 ああ、そうそう。それは言える。

由紀子 最後も何なん、この二つ、と思つて。最後だけ多行なんだけど。

音楽が止んだら

薔薇の実がひとつ

なんで多行にしたのか、もつと意味あるものだったら良いけど、何これ、と。

好摩 だけど、僕は、このメフィストにシビれたんだよ。

由紀子

大熊座 遠く言葉の声すなり

月白し 貴様と話したきことが

こういう一字アケも、わざわざ要らんと思う。

好摩 要らんね。だから、僕は一句単独ということ、この「メフィスト」を推しますよ。

耕司 なるほど。

好摩 ここまで応募作品を読んできて、

メフィストで、イイじゃんって思ったね。でも全部読んでみたらたいしたことなかった。

耕司 次に行きましょう。「豚二十句」をいただきました。どの句が、というところではないんです。私は、作者が何かのシバリを自らに施してゐるのに甘いんです。

由紀子 ああ、これね。  
耕司

まくなぎの国境ひより豚消えぬ  
青芒若き豚から見えぬなり

もう誰も豚には追ひつけず西日

こんな感じで豚が並ぶわけです。こういうふうの一つの言葉を使うと、その語が記号化して、ここに何かを当てはめて考えたくなっちゃう。豚とは何かの象徴なんじゃないかって思い始める人が出てくるわけですね。喩、かな。なんてね。

好摩 ああ。

耕司 そういう何らかの象徴性があるかといえ、この二十句の豚には、あまり感じられない。むしろ、そうかんたんに読者に感情移入させないバリアのように、豚が用いられているのではないかとさえ思ったのです。そういうことで、

二十句にやや閉鎖的な一貫性を与えているんだろうと。その割には  
一國が豚の眼下に秋の空  
なんて、一句としても面白いな、なんて思いました。

旅行記の豚泉まで一万里  
こういうのはわりと予定調和の枠の中に入っちゃってますね。そういうベタな部分に工夫が足りない要素があると思えます。ときに、豚とは、人間より劣位に位置付けられて欲望のままに生きています。先に観を持たれがちですよ。〈俗〉なわけです。句に〈俗〉の濁りのようなものを与えたくて、豚にしたのかなとも思いましたが、先ほども申しましたように、そういう深まりをあまりもたずに、終わってしまったという観はあります。

由紀子 「豚二十句」と持つてくるなら、もうちょっと工夫が欲しかったと思いませんか。

耕司

くさめして豚いま渡る石の橋  
これ、「いま」が不要ですしね。

由紀子 たった十七音とはいえ、そこにけっこうムダが入ってくるんですよ。ムダな言葉がある句、多いですよ。

好摩 多い、多い。

由紀子 たった十七ですのにね。

好摩 たった十七だから、ムダがムダとして際立つんだよね。

由紀子 「豚」を持つて来ればイイというこの作り方、安易ですよ。

好摩 「豚」のところを塗りつぶして、ここに何を持つてくるかなんてやったら面白いんじゃないか。何入れてもイイよってことで。

耕司 ううむ。

好摩 「豚」を全部潰しちゃって。  
耕司 伏字■にしちゃうってことでか。するとかなり気持ち悪くはなりませんね。  
好摩 (笑)

耕司 樋口さんが四番目に推す「明朝体」、まいりましょう。

由紀子 なんかね、これ意味がわからないですよ。○を入れたのは寸閑を目覚め鱸の反射光

これ、何やろうと思っただです。

水まとぶごとくありけり春シヨール  
この場合の「ごとくありけり」が効いてると思っただです。「春シヨール」の長さみだいな感じがすぐ出て、「ごとく

好摩 多い、多い。

由紀子 たった十七ですのにね。

好摩 たった十七だから、ムダがムダとして際立つんだよね。

ありけり」みたいな仰々しい言葉がうまくマッチしてるなと思っただけです。飽きさせないようなものがあつたような気がします。すごく推すわけではないんですけど、この二句が好きでした。意味なく価値がある、そんな感じがしたんです。うまくないですか？ これは、俳句としたりちよつと変わつてる俳句ですか？ オーソドックスですか？

耕司 オーソドックスかどうかは、どうにもわかりません。

おとうとをひなたみづだと思ふなり  
「おとうとをひなたみづだ」と思うのは作者からしか見えないこと。それを「思ふなり」とわざわざ言つて見せることで、頭の中の像ではなく、そう思つている作者そのものが対象になる感覚がある。そこで、俳句としての落ち着きのある振る舞いが生まれているように思えます。先ほどの句も、「春シヨール」をむりくり「水」になぞらえようとあれこれひねくりまわすよりは、「ごとくありけり」と書いてしまつた方が、読者にとつてもすつきりと落ち着く。いずれにせよ、自分からしか見えていないことがどのように読まれるかを考えている点において

は、俳句的想像力によつて書かれていると思ひます。

寒夕焼人体模型無毛なる  
こういう断言も使いこなしていますしね。ただし、

めづらしき生物として花を食む  
この「めづらしき」は、これも作者からしか見えない何かなのでしようが、一句に説明としては書かれていても俳句に参りえていなくて、残念な感じがしました。

由紀子 俳句に参加していない・・・。  
耕司 「めづらしき」は作者の感じている感覚です。それを読者に伝えるよすがとして「花を食む」というのが作者の中で何らかの価値を持つているのでしよう。それはそれで、いい。むしろ、その価値が自分の中でカッチリしているからこそ、読者との間にカスガイのようなものの手当てされなくなつちやつていように思ひます。「めづらしき生物」が自己像であり、頓晦である可能性もありますけど、それが言葉の表現として書かれていないということです。

好摩 漠然としちやうよね。  
由紀子 漠然。

耕司

鶯餅裏声に似た発芽かな

「裏声に似た発芽かな」これだけでもお腹イッパイン感じがするところに、「鶯餅」が参戦することで、乱闘が始まつちやつたように感じます。ともあれ、私は「明朝体」の作者の感覚は好きですよ。

由紀子

君にだけ言ふが蛭を飼つてゐる

この句も、四番目に良いと思ひました。

陥りやすい穴、つてどういふ穴？

耕司 さて、五番目の推しに入りましよう。澤さんの推挙で「漫画を買いに」。

好摩

窓辺には赤み少ない柿落葉

水槽の底に小さい鮫の顎

備蓄米日々捨てられる春の海

こんなところを取りました。何か面白くなりそうだなとは思つただけだね。

由紀子 面白くなりそうというのはそれほど感じなかつたです。

耕司

咳の子の漫画を買いに売店へ

一つの事実を素直に書き下すようなスタイルですね。円錐の新鋭作品賞に対して

私が求めているのは、作者が自分をいかなることシバリかという自律のありようです。俳句は、俳句であるだけでシバリといえばシバリになります。そこから解放されることを目指す人もいますでしょう。俳句のシバリを利用して、自分語りをする人もいます。しかし、あえて自分を律するルールを持つとうとする志向に注目したいと思います。それが成功しているかどうか、そこはいろいろと確認しなければならぬ点があります。「漫画を買いに」のこうした平明な句は、俳句という枠の中でのほのと書かれているものであり、それはそれで良いとは思いますが、新鋭作品賞という観点において選からこぼれてしまいました。

**好摩** 一句で以て説明しようとする傾向が強くて、俳句形式や言葉の知恵というものを引き出すに至っていない。初心者なのかな。

**耕司** さて、それでは「ゆづりはの國」について。

一句にまとまろうとすると、何らかのシバリにおいて壊そうとしているフシがあります。

「云ふ人の舌の鯨の暗いこと

何かを語っているときの舌ですから、口中の暗さではないのでしょうか。話の内容が暗いなどというわけでもありません。「鯨」という異物と人間存在を接続させることで、人間に関する常識がすんなりと通らないように手当てをしています。舌そのものの、「云ふ」という営みを持つ生物の、それらの存在そのもの「暗」さを言っているのかも知れません。こういう言葉の感性の面白さがある。

なまぐさい鶴が室外機を帰る

一方で、この句になると、何のこっちゃ、という読者の戸惑いを乗り越えてまで言葉が押し寄せてくるのが無い。あまりにわけがわからないと、読者は句の言葉「喩」として解釈せずにはいられなくなったりする。ところが、「喩」で分かり合うのは、俳句としての面白さとは異なるような気がします。そういう喩へ倒れこんでしまいそうな表現もあるのですが、総合的には、言葉に関して面白い感性を持つ作者だなと思いました。

やがてべたつく桃を入りする指のこの「やがて」なんて要らないと思うんですよ。韻律も含めて、俳句の修辭らしくしようとコーディネートしてしまうと

ころがあるんでしようが、韻律のまとまりなどはさておき、言葉の感覚を剥き出しにした方が面白いのではないかなども思いました。

**由紀子** こういう句、難しいですね。

**耕司** 澤さんはまったくお取りになつていないと思います。

**好摩** うん。一句も取つてない。

**耕司** ええ、わかります。次へ行きましょう。「川を越える」ですね。

**由紀子** これはけつこう〇があつたんです。

冬の鳥グミのかたちを見せ合つて

柗の花スプーンをゆるく舐め

嘘が下手たんぼほの群がって咲く

はつなつのホースは坂を伸びゆけり

桃の香の満ちてガラスの多い部屋

眠つていいよ冬の川を越える

こんなところが〇。ただし、ペケも多い

んです。日常の捉え方、そのスポットの

当て方に、ありふれているようでありふ

れていない何かが表れているようにも思

いました。そんなところがよかつたわけ

です。地道なんですけどね、わりと。

**耕司** いわゆる「等身大の」と言われる

ような作品群です。自分の感性を言葉に

しようという意識のある作品ですよ。

由紀子 意識が言葉に定着してますよね。

耕司

柀の花スプーンをゆるく舐め

この「ゆるく」。柀の葉はトゲトゲ。柀の実はクリスマススを連想させますね。では、柀の花のありようとは、どんなものなのか。「ゆるく」というのは、舐め方を形容するような形容詞としてふさわしくないのでしょうか、だからこそ、このズレてる感じが、柀の花に寄り添うような気がするという感じですね。そりゃそうと、

春風やおなかにひものあるズボン

これが気に入りましたね。

由紀子 あ、これはね、私が一番陥りやすい穴なんです。それでね、ここに落ちないぞと決めました。

耕司 陥りやすい穴、ってどういう穴なんですか？

由紀子 「おなかにひものあるズボン」で満足してしまう。この句の場合で言えば「春風や」との関係性はそれほど考えずに、もうええやん、と思っちゃうんですね。

耕司 なるほど。

由紀子 でも、そうじゃないだろ、と。だから「おなかにひものあるズボン」っていうここに落ちてしまっただけじゃないぞ、と。そういう意味で、意識させられた句なんです。

耕司 面白いけど、ここで面白がってちやいけな、と。

由紀子

ほのぼのと塗り忘れたる日焼止め

白線を道にび割れ草の花

改札を抜けて町 寒くて走る

こういうのは、良くないなあ、って思うんですよ、わたしは。だから、ペケと○がこもそれぞれ多かったけれど、○の数がその中で多かったです。

好摩 僕が面白いと思ったのは、

湯に茶葉のわつと膨らむ春の星

永き日や台拭きに水吸わせつつ

とかだね。とくに「永き日や」の句は面白いんじゃないかと思ったんだ。台布中のことですよ、これ。

由紀子 ものすごく川柳的に抜ける句が多かった。「湯に茶葉のわつと膨らむ」とか、「台拭きに水吸わせつつ」とか。

好摩 「わつと膨らむ」は稚拙だね。

耕司 まあ、気になるのが「わつと膨らむ」という時間と「春の星」という時間の噛み合わなさ、でしたでしょうか。同じように「永き日や」という時間の単位と、「水吸わせつつ」の「つつ」がサポーターしてしまう時間のイメージとのズレも、その類ですね。永日をながなが水吸

わせ続けることになっちゃうわけです。水を吸うだけ吸っちゃった台拭きが永き日にほつたらかしくなっている、というイメージを持つにしても、そう読むのを「つつ」が邪魔します。

由紀子 なんか、無理に季語を入れて俳句にしてる、という感じ。日常における感慨と季語。それを組み合わせただけの。

耕司 つまり、川柳的に面白いフレーズを季語に接続させて、うまく機能しているかどうかを確認しないまま、ほつたらかしくしちゃったという感じですか。

由紀子 そう、そう。そういうのは、俳句の方になりあると思うんですね。フレーズの面白さみたいなのと季語を、

やっぱりもう少し考えてつけてほしいな、と思うことがわりとあるんですね。

耕司 そういえばそうですね。

はつなつのホースは坂を伸びゆけり



これは面白いですね。  
由紀子 これ、面白いと思います。

### 賞の名前および一句鑑賞

耕司 賞について、です。こんだけバラバラですから、ひとつの賞に絞り込む必要はないということでもよろしいでしょうか？

好摩 そうだね。

耕司 賞に命名していただいて、それぞれ顕彰するというのでいいですね。山田は「白桃賞」、澤さんは「花車賞」、樋口さんはいかがしましょう。

由紀子 「夢前賞」(ゆめさきしよう)にしようかな。

耕司 おお、いいですね。かつこいいですね。ここに来るまで、夢前川沿いを移動してきました。まさしく、この地名ですものね。

由紀子 今、考えました。

耕司 ということで、ここからは、注目の句について話を進めさせていだきたいと思います。

由紀子 推奨作品以外から

「囀りや硯の水は水のまま

「煙突」より

「囀りや」で切れていて、そしてかすかにつながつている。そのつながりかたがいいです。「硯の水」は静止している。春永や異国で佐藤と名付けられ

「一月二月」より

取った上で言うんですけど、「春永や」が効いてないかも。でも、何か気づかせられるものがあるなあと思いました。風をあざなふ夏蝶のつけ根かな

「夜の日だまり」より

こちらもちよつと変わっていて、ヘンさ加減がいいです。

耕司

振じ切れる麒麟の首のごと野分

「ジオラマ」より

比較的ねらつて言葉进行操作する傾向の作品が並んでいる中に、これがありました。これはちよつと気持ち悪いようなんですけど、暴風雨である「野分け」が、こういう即物的なぞらえをされているところに面白さを感じました。

由紀子

変わってますね。

耕司

大寒のボタン押さねば降りられず

「手ぶら」より

そりやどんな季節でも「ボタン押さねば

降りられず」ということでしようが、「大寒」に「わざわざ何かをしなければ自分の時間が先に進まない」感覚を見出しているようなところが、いかにも俳句的な書きぶりではありつつも、好ましく思いました。この「手ぶら」という作品は、言いたいことをあえて言えちゃっていることで損をしているような趣でしたが。

父欠けて母とレモンと海老フライ

「流山」より

父が何らかで欠けたフレームにおいて、「母とレモンと海老フライ」が並列の図に収められている。父が欠けることにより、なんらかの力から解放されてあらゆるものが等価の関係に還元されたのか、父がいれば「母とレモンと海老フライ」に何らかの関係性が復元するのか。じつのところ、作者はそれほど深刻な意味をこの句にもたせているわけではないでしょう。それでも、人間が物体に還元されていくような不思議な感覚を直截的に書きあらわすことができちゃった句のように思いました。

好摩 これは面白いよね。

由紀子 これは面白い。言葉って作者の意図とは別に勝手に遊んでくれるで

しよ。本人は思つてなくても、読者の方で生まれる面白さというのがある。この人の場合、こういう句の存在を、偶然できちゃったものと思つてしまつたんです。

耕司 そうなんですよ。そういう気配がある。

由紀子 その偶然できちゃつた感じがあつて、選べなかつたんだと思いますね。好摩 こういう作品を書いたことを指摘されて、それから意識的に自分の句を書くようにしたら、もつと面白くなるよね。耕司 自分の句が育つのを待つなんてなかなか出来るもんじゃありませんで、それ途中かもしれないけど出しますよね。好摩 書いた句が、それで正解だと気がつかなきやいくら待つたつて同じだね。

耕司 ううむ。認識が何かの途中であつたとしても、表現する勢いのようなものを掬い出せれば、新鋭作品賞を開催した意義になるんだとは思いますがね。好摩 私が選んだ三句。

メフィストの眼の色知るや初嵐

「夢」より

蠅生まる葉の味のするくすり

「微の王」より  
穴惑ひ駅はいつでも工事中  
「境界線」より

メフィストの眼の色知るや初嵐

先ほども述べただけけど、よくぞ「メフィスト」を持つてきたな、と思つたね。

由紀子 この句はいいと思います。「眼の色知るや」もいいと思います。「初嵐」がなぜ合うのか、ちよつとわからないところがあります。

好摩 ううん。「初嵐」でいいんじゃないかな。

耕司 「メフィスト」に「嵐」はベタツキっぽくなつちやいますよね。そこを「初」とつけることで、メフィストが出没する欧風空間と、「初時雨」などというように季の移り変わりにあはれを催す和の意識との間で、程よくねじれが生まれるようになつていんじゃないでしょうか？  
由紀子 「初」っていうのが、そういう逸らし方をすると読まなかつた。「初」というのは、もつと強いものだと思つてたんで。

蠅生まる葉の味のするくすり

これ、面白いと思つたんですよね。

耕司 これ、「蠅生まる」が効いてるんですか？

好摩 効いてるでしょうね。

由紀子 これ「葉の味のするくすり」というのは面白いと思つたんですけどね、「蠅生まる」との関わりが、どうも今ひとつでした。

耕司 「蠅生まる」という時間なり運動なりと、「葉の味」という作者が体験して得た認識との間で、どのような接点が発生するのか、それがわかりにくいと思います。この作者の句でしたら次の句に○がついています。

つちふる日窓に無数のぬひぐるみ

「微の王」より

何てことの無い風景です。ともあれ「つちふる」ということ目の撃者として、人ではなく、人の営みの及んでいる無生物が当てられているのが面白いと思ひました。

由紀子 季語について考えると難しいですね。考えとか感情にピタツとはまる場合と、キマらないからイイ場合もあり、うすーくつながっているから良い時もあり、で。

耕司 作者が意図するものは、それとし

て、どういう読者に発見してもらったか、というのも大切なことになりますね。言葉にされた考えや感情、それと季語との関係、それらをどのように広げたり深めたりして読んでくれる人がいるか。それがたった一人であつても、その時、その都度、表現は生まれるのだと思います。

好摩 最後の一句

穴惑ひ駅はいつでも工事中

耕司 これだから俳人は「穴」が好きなんだ、ということになりますね。

好摩 そう言われちゃうかもね。

### 表現の「ありきたり」を脱すること

耕司 おかげさまで、今回も多くの応募をいただきました。ありがとうございます。全体を通して印象をお願いします。由紀子 やつぱり「ありきたり」が多かったような気がします。作者自身のもの見方っていうんじゃないかと、無難とか。

好摩 無難、というんじゃないかと、ものすごく難だらけなんだよ、私から言わせれば。

由紀子 それと〈省略〉って難しいですね。読んで、とても難しいなと思いま

した。

好摩 〈省略〉も〈飛躍〉も難しいね。

由紀子 〈飛躍〉は、まあ、〈省略〉ほどではないかと。

好摩 でも〈省略〉するから、〈飛躍〉が生まれるんだよね。

耕司 こういう賞というスタイルになると、言葉としての作品を読むのではなくて、メッセージの強さみたいなことから顕彰しちゃうことがあるんですよ。たとえば、東日本大震災の直後だったら、東日本大震災をメッセージとして示した作品に賞が行くという傾向があるわけです。その是非については措いておくとして、メッセージの強い言葉とは、詩歌であることをやめて情報の方に転じることも少なからずあるようで、ついつい、俳句の賞であることを後退させて、考え方や感情そのものに賞をあげることも多くなりかねないなと思ってるんです。

今回、樋口さんが「ありきたり」と言っているのは、考え方や感情のこともさることながら「こんな言い方見たこと聞いたこと無い」というのと対極の状態を想定してのことだと思います。新しいものが生まれてくる時って、メッセージの内

容が濃い方が良いように考える人もいるかと思いますが、ひよつとしたら、内容なんて二の次でも良いのかもしれない。要は、言葉の関わりとしてそこに句として示されていること、その句の表現そのものに価値はあるけど、かといつてメッセージの道具にはなっていないというようなことの良いのでは無いかとさえ思います。今回は、また、新しい感性に出会えたと思いますし、今後とも、新しい句との出会いができれば嬉しいなと思います。

今回は、樋口さんと一緒にきて勉強になりました。新鮮な視点を、応募作品に注いでいただいたと思っております。ありがとうございます。私と澤さんは、ほとんど意見が合わないんですが、俳句という観点からの落ち着き先が暗黙のうちには共有されてしまっているところがあるんです。そこらへんが、いつも課題ではあったんです。

好摩 課題かよ(笑)。

耕司 そこらへんを揺さぶってくださいました。ありがとうございます。